

日本百街道紀行

街道とまちづくり

第31回

木ノ芽古道

海陸交通の結節点として発展した 魅力と活力にあふれるまち 敦賀

敦賀市長(福井県)

湧上隆信



はじめに

敦賀市は、福井県の中央に位置し、北は日本海を臨み、他の三方を野坂岳、西方ヶ岳、岩籠山の敦賀三山をはじめとした峰々が平野部を取り囲むように連なっている。

本市は、古くから天然の良港である敦賀港を中心に、対岸諸国や国内各地を結ぶ交通の結節点として栄えたまちであり、明治期に



敦賀まつりの様子(氣比神宮大鳥居前)

は、日本初の鉄道となる4路線の一つとして、琵琶湖畔―敦賀間の鉄道建設が計画されるなど、海陸交通の要衝として、発展してきたまちである。

街道と敦賀

本市には、平安初期に拓かれ、明治初期まで千年以上にわたって、敦賀と福井方面を結ぶ街道として使われた木ノ芽古道があり、この道を紫式部、親鸞、新田義貞など後世に名を残した偉人達が往来している。江戸時代には「おくのほそ道」を記した松尾芭蕉、幕末には尊王攘夷を唱えて京を目指した水戸天狗党の一行などもこの道を通っており、日本の歴史にも深くかかわる街道となっている。

松尾芭蕉来訪後の敦賀ではその



市内各地に点在する松尾芭蕉の句碑

足跡を訪ねて多くの俳人が訪れ、俳句文化が連綿と受け継がれてきた。現在でも毎年全国俳句大会が開催され、学校においても芭蕉や俳句に関する学習が盛んに行われている。

また、敦賀で捕らえられ、命を落とした水戸天狗党の一行は、住民に手厚く葬られ、松原神社に祀られている。このことを機に、松原神社100年祭が行われた昭和40年に、本市は水戸市と姉妹都市

となり、観光交流や防災などさまざまな分野で相互協力や親善が行われている。

やさしい日本人がいたまち「敦賀」

敦賀港は明治32年に開港場(外国貿易港)の指定を受け、明治35年に敦賀―ウラジオストク間の定期航路が開設された。さらに明治45年には、新橋駅(東京)―金ヶ崎駅(敦賀)直通の「欧亜国際連絡列車」が開業し、世界への玄関口として繁栄した。

大正期には、革命等に伴うロシア国内の動乱により、シベリアに取り残されたポーランド孤児を救出するため、世界の国々が支援を断る中、日本は速やかに孤児の受け入れ体制を整え、救助に駆け付

けた。この際、敦賀港には多くのポーランド孤児が上陸し、住民たちが食料の提供などを行い、温かく受け入れを行った。

また、昭和15年には、ドイツの侵攻により国を追われたユダヤ人難民の命を救った杉原千畝領事代理が発行した「命のビザ」にまつわる、難民受け入れの舞台となり、過酷な状況で上陸するユダヤ人難民を住民たちは温かく出迎え、少年が空腹の難民にリンゴを提供したなど、いわゆる人道の港のエピソードが語り継がれている。

本市では、これら人道の港の歴史を背景に、現在もポーランドやリトアニア、イスラエル等との交流を盛んに行っている。

敦賀の新たな挑戦

2022年度末には、北陸新幹



人道の港に関する歴史資料を展示する「敦賀ムゼウム」

線の敦賀開業を控えており、新幹線の受け皿づくりとして、北陸新幹線の玄関口となる敦賀駅周辺エリアから古代の息吹が感じられる氣比神宮周辺エリア、人道の港の歴史など明治大正浪漫と昭和ノスタルジーが感じられる敦賀港周辺エリアの地域資源等の磨き上げを行っている。

また、本市独自のまちづくり施策として、周辺地域との広域的かつ一体的な経済圏・生活圏を形成することを目指した「ハーモニアスボリス構想」の策定に取り組んでいる。

この構想は、周辺地域とともに協動的に発展していくことを理念として、周辺地域の産業との間で製品や部品をはじめとした、いわゆるモノとエネルギーの新たなサプライチェーンを構築することによって、本市の産業構造の複軸化とエネルギーの多元化の実現を目的とするものである。

現在、その先導事業として、地場産業の強化と周辺地域との新たなモノのサプライチェーン構築に向けて、企業が行う研究開発を支援する事業を実施するとともに、水素エネルギーの活用を中心とした新たなエネルギーのサプライチェーン

ン構築に向けて、水素燃料電池バスの試験運行による市民意識の醸成と自立型水素エネルギー供給システムの導入検討を進めている。

北陸新幹線開業に向けた地域資源を活かしたまちづくりを進めるとともに、交通の要衝の特性を生かした新たな産業・エネルギー政策に、市民と一丸となって取り組み、「将来世代に誇れる新たな敦



水素燃料電池バスとダイヤモンド・プリンセス(敦賀港)

賀」を築いてまいりたい。

木ノ芽古道 一口メモ

千年を超え畿内と北陸をつなぐ古道

木ノ芽古道は西近江から敦賀を経て府中(越前市)に通じる「北陸道」の一部で、敦賀今庄間(約26km)

のうち、新保宿から二ツ屋宿まで(約6km)をつなぐ古道である。道が拓かれたのは天長7年(830



年以前とされ、明治中頃までの約1150年間、畿内と北陸を結んで人馬の往来、荷物の運送に大きく貢献してきた。

明治20年(1887年)に東浦に車道が開通して以降旅人の往来は途絶えたが、随所に古道の面影を色濃く留めており、文化庁の歴史の道に指定されている。

企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」